

が書かれています。論述問題は出題者の意図をくみとり聞かれていることに對し正確に答える姿勢が大事になってきます。この参考書はその姿勢を0から磨き上げてくれるものだと思います。解答例や減点例として実際に生徒が書いたものをピックアップしてくれてあるので、自分の解答と照らし合わせやすいです。またいくつか入っているコラムも実践的なものが多くておもしろいですよ！



教科書

参考書ではないのだが、世界史の論述を始めるにあたって教科書ほど役立つものはないと思う。何気ない教科書中の文章が、実はそのまま論述に使えてしまうほど上手にまとめたあたりするのだ（本当に引用しちゃ駄目だよ）。特に頻出分野においては覚えるほど読んでほしい。最初から400字論述をスラスラ書けるわけがないのだから、論述に慣れるために教科書や用語集を併用していくとよいと思う。また会社によって微妙なニュアンスや記述されている部分が異なっていたりするので、様々な教科書のうちから自分に合うのを選んでみて下さい。山川と東京書籍が人気みたいです。



青木世界史B 講義の実況中継 語学春秋社

一橋の世界史は論述ですが、論述を書くにあたって歴史の流れを掴むということは必須条件です。ただ知識をつめこむだけでは適切な論述は絶対に書けません。この実況中継はその世界史の流れをわかりやすく説明してくれているので、すーっと頭に入ってきます。語句を覚えるというより歴史の流れを掴み取ろうとしてやってみて下さい。まだ通史が終

わっていない人には特にオススメ。しかしこれだけではヨコの流れは掴みにくいので、そこは教科書や図説でカバーするようにしてください。



詳説世界史 論述練習帳 山川出版社

この参考書は論述用であるから、実際に論述問題を解いて使うのももちろん良い。しかし世界史にかかる時間の無い受験生、または通史が終わって間もない現役生は、解説を読みストーリー性をつかむことが効率のよい学習法であろう。やり終えたときには世界史の全体像が見えてきて、頭の中がスッキリするはずだ。また過去に出題された入試問題が通史・テーマで分類されているため、一橋頻出の分野・テーマをピンポイントで学習することも可能である。しかし一通り古代から現代まで問題集でやっておくと理解度が全然違う。教科書や参考書を読むのも確かに重要だが、試験本番にパツと思いつけるのは自分で問題を一度解いたところだから、時間をかけてでもこの問題集を一冊解ききることを薦める。余裕があれば、問題・解説をノートに写したり自分なりにまとめ直すのも有効であろう。論述テーマの学習は通史理解の助けになり、センター対策にも役立つから、論述を書くことばかりにとらわれず、ストーリーを学ぶことを忘れないでほしい。



世界史 論述トレーニング Z会

世界史論述の練習をゼロから始められる参考書です。最初は100字未満から始めて、徐々に字数を増やしていきます。解答・解説も親切で自学にも適しています。しかし、自

分の論述を客観的に見るためにも、世界史担当の先生に見てもらうことをオススメします。私はこの本をやる以前は世界史論述の経験が全くなかったので、本の指示通りに最初からやって、学校の先生に添削してもらいました（明らかに本番で出なそうな時代・テーマのものは除いて）。意外と時間はかかりましたが、赤本へのつなぎとして役に立ったと思います。

<日本史>



実力をつける 日本史 100 題 Z会

基本的な用語を覚え、時代の流れをおさえるにはもってこいの一冊。この一冊でセンターから私大、二次試験まで（論述を除く）ほぼ全てを網羅できる。解説が詳しく、解説冊子が問題冊子より分厚いが、それでも解説のない間も何問もあり、若干の物足りなさは感じるかもしれない。学校の定期試験対策、あるいはセンター・論述の足固めとして利用すると効果的だろう。一回解いて終わり、じゃなくて、時間をおいて繰り返し解くことをお勧めする。あと、個人的に表紙のデザインが好き。



石川日本史B 講義の実況中継 語学春秋社

講義形式になっており、非常に読みやすいし分かりやすい。重要な部分は詳しく説明している。何度も繰り返し読むと、歴史の流れがある程度分かってくるであろう。しかし基本的に私大向けに作られている。また近代史の内容は良くないという声もあり、これを読んだ後には必ず教科書を読むことを勧め

る。この参考書だけに頼るのはキツイと思う。



教科書

論述を書く上で最も参考になるのは教科書でしょう。歴史の流れをつかむのにもやくだちますし、教科書の記述をそのまま使えることもかなりあります。一橋の日本史は日本一難しいと言われていますが、教科書レベルを超えた設問にまともに答えられる人はほとんどいないでしょう。そういう意味でも、教科書レベルをマスターすることは特に社会学志望の人には必須だと言えます。（もちろん注も含みます。）論述に使えそうなテーマ（経済史・外交史など）に関する記述はノートに書き出すと後々勉強しやすいでしょう。



日本史 論述トレーニング Z会

字数ごとに分類された4章構成で、前から順番に解くと字数の少ない論述から多い論述へと段階的に練習できるようになっていて論述になれるのにはちょうどいい。また近代の内容が充実していて、扱っている項目がいかに一橋が好みそうなものばかりなので、一橋の日本史に欠かせない大事なポイントがおさえられる。基本問題としてはいろいろな大学の過去問が載っていて、しかも解説が詳しいことが本当に役立つ。しかしながら全問解く必要はなく、一橋で出題されやすい分野・時代を選んでやればいいと思う。かといって扱われている項目には限りがあるので、教科書と合わせて使っていくことで、全体の流れの補強にするといいと思う。

<地理>



合格講義！ 学研

系統地理編、地誌編の2冊があるが、どちらも細かい知識が図を中心にがわかりやすくまとめられています。内容が深いので、はじめに簡単な参考書で流れをつかんだ後に使用するのが効果的です。しかし内容が深いといっても、一橋の地理を受験するにあたってすべて必要不可欠な事柄が書かれているので、読んで理解するというよりも、むしろすべての内容を暗記してしまうくらいのつもりでとりかかるとよいでしょう。そうすれば地理用語の使い方を自分のものにすることができ、地理に関する思考力、論述力のアップに直結させていくことができるでしょう。

<公民>



点数が 面白いほどとれる本 中経出版

公民選択者のほとんどが購入するであろう参考書。人気だけでなく中身もしっかりしていて、ほぼ独学で公民を学ぼうとしている人でも0から学べるようになっている。ただ全ての知識を網羅している訳ではないので、満点近くまで狙っていきたい人は実際にセンター形式の問題を多く解いて、分からなかったことや書いていないことを随時書き込んでいくのがよいと思う。



解決！シリーズ Z会

頻出範囲を網羅して、答えを出すだけでなく考え方で示してくれる素敵な参考書。ただし教科書や資料集などと併用することをおすすめします。例題を自分で考える→正解への近道を読んで再考する→答え合わせ→資料集や教科書で該当箇所を確認、というステップを踏んでいけば確実に力がつきます。一つ一つの問題の答えを出すだけでなく、一つ一つの選択肢に対して検討を重ねることが大切ですが、この参考書ではそのステップが自然と踏めるようになっています。もちろんこの参考書の後には、同じようなステップを踏みながらセンターの過去問をやって下さい☆



きめる！シリーズ 学研

センター公民（とくに政経）を受験する学生の大半が使う必読書。センター頻出範囲を見やすい図表と端的な解説でまとめられていて、公民を学習し始める際の入門書として最適である。また政経に関しては巻末に時事トピックが掲載されており、新傾向にも対応できるつくりになっている。しかし、頻出範囲以外の事象については多々掲載しておらず、また頻出範囲でも具体例の記載は乏しい。本番で80点とれれば十分な人はこの本のみで対応可能だが、満点近くを目指す人は山川出版の政経用語集などで随時知識を補充することが不可欠である。

<理科>



点数が 面白いほどとれる本 中経出版

表紙のイラストがアレなので買うのに若干抵抗がある人がいるかもしれませんが（笑）内容は真面目です。一橋はセンター理科の配点が高いので、理科対策に力を入れる人が多いと思いますが、この本は文体も分かりやすくイラストも多く、インプット・アウトプットしやすい考え方も載っているので頭に入りやすいはずです。このシリーズのキャッチコピーは「0から始めて100まで狙える」だったと思いますが、このシリーズを使って「0から始め」ることは余裕でできますが、「100まで狙」うことははっきり言って難しいです。高得点を狙う人はこの本を仕上げたら、もう少し詳しい参考書や問題集を使いましょう。センター理科に向けての第一歩としては本当にオススメの参考書です。



きめる！シリーズ 学研

きめる！シリーズは、文系であまり理系科目に時間を割けない一橋受験生の有力な手助けになるという評判です。何といっても赤シートが付いているので暗記がし易いです。また説明も丁寧で分かりやすいと巷で噂になっています。しかし、自分はこのシリーズの生物をかつて使っていたのですが、やはりこれだけだと生物の中で差がつくといわれる考察問題の対策が不十分になるような気がします。なので、この本で基礎事項を確認しつつ他の問題集などで考察力を高めておくといいかもしれません。



解決！シリーズ Z会

センター理科対策の完成を目指す人にオススメの参考書シリーズです。覚えるべきことが数ページにわたってまとめてあり、その後に確認問題があり、章末にも問題があります。まとめページには赤シートがついているので暗記に役立ちます。問題は考えさせられるものが多く、理解の一助になるはずです。私11月にこの本を買って、センター本番までに2回解きました。どの参考書にも言えることですが、何回か解くことはやはり重要なことです。単元別になっているので、自分が理解してないところから始められます。ただし問題量が少なく、情報量が不足している部分もあるので、他のマーク式問題集などと併用したほうがいいと思います。

<論文>



過去問（赤本） 教学社

いくら新聞を読んで教養が身についているとしても、いくら国語の勉強で読解力がついているとしても、一回も小論文書いたことのないのに、いざ本番で時間内に適当な時数で美しい小論文が書けますか？一般人にはできないと思います。小論文の試験では、インプットだけでなくアウトプットする力がもろに問われます。ですから、知識・読解力だけでは不十分で、実際に過去問で書く訓練をする、ということが不可欠になってきます。過去問を解いてるうちに傾向にも慣れてきますし、問題になっている文章について毎回真剣に考えさせられるわけですから、その知識も定着しますし、思考力もつきます。あと、書いた小論文は先生など誰かにみてもらうこと。文章というのは誰かに読んでもらうために書くんですから。相手にきちんと伝わってナンボのもんです。

<参考書番外編>

分野別などの関係で参考書ランキングには掲載していませんでしたが、英語・数学・国語・地歴のすべてにおいて駿台出版の「一橋への〇〇」が上位に入っていました。この本は駿台が行った一橋実践模試の過去問集で、赤本は同じ問題は2度は出ないという点で傾向をつかむためのものにすぎませんが（まあ世界史とか頻出分野ありますけど・・・）この本は予備校陣営が必死に一橋の入試を予想して作ったものなのでその点で赤本とは違った利点があると思います。また解説や採点基準、実際に模試が行われた当時の平均点など模試ならではの情報も載っているので、自分の力を客観視するために活用するのもよいかもしれません。

また地歴では多くの票が集まっていたのでランキングに入れましたが、どの教科でも「教科書」や「図説」、「資料集」といった学校で配布される教材が多くランクインしていました。参考書はなにかオーラを発して私たち受験生を魅了しますが（笑）要は自分がうまく使いこなせるかだと思うので、無理に参考書に頼る必要はないと思います。実際参考書や予備校のテキストを全く使わずに一橋に受かっている人もいますので☆特に地歴公民においては図説・資料集は重宝するので上手く使ってみてください。

Column : 一橋でなきゃいけない理由

受験生活を乗り越え合格を勝ち取るには強い志があったほうがいい、というのは誰もが同意することだと思います。私は初め、一橋への単純な憧れこそ抱いていたものの、進学先が「一橋でなきゃいけない」理由が見つけれず、何のために一橋を目指し受験勉強をしているのかわかりませんでした。そんな時、KODA 祭の受験生相談室で相談員と話したことが、私に「一橋でなきゃいけない」理由をくれました。KODA 祭委員として黄本をつくり相談員になることでその人に恩返しをしよう、これだけで私は頑張れました。そして今、それを叶えています。どんなことでもいいと思う。自分が走るための理由は自分が決めればいい。目指す理由を見つけた君は、誰よりも、今までよりずっと、強く走れるはず！がんばれ！！

Column : TOEFL

一橋大学では1年次に英語ⅠA・ⅠBと英語Ⅱを2つ、という合計4個英語の授業を取らなくてはなりません。そのうち英語ⅠAとⅠBのクラスは基礎強化、標準、発展の3つのレベルに分かれています。クラス分けの材料として去年までは二次試験の英語の成績が使用されていたのですが、今年からはなぜかTOEFLが導入されました。私は入学試験とたまたま同じ教室でこのテストを受験したので、「ああ本当に入学したんだなあ」としみじみ感じてしまいました。また私の周りには発展クラス入りを回避するために手を抜いて試験を受けている人も結構いましたが、良い子のみんなは真面目に受けるべきでしょう（笑）

Column : 講習の取り方

予備校の講習パンフレットには魅力的な言葉が並んでいると思う。講習を受講すればあたかも学力が飛躍的に上がるかのように。確かに学力向上の手助けにはなると思うが、向上の度合いは受験生自身の予復習などの努力にかかっている。つまり講習をただ受講するだけでは何にもならない、むしろ時間とお金の無駄に終わってしまう。受験生には自分に何が必要か、何を伸ばさなければならないのかを考えて選ぶよう気をつけてほしい。そして漫然と講習を受講せず、予復習をして何かをつかみ取ってほしい。